

## 先駆。

### 三十年の歴史を刻む「色川システム」

那智勝浦町の山あいに広がる色川地域。「にほんの里100選」(朝日新聞社)に選ばれた棚田の美しい山里である。かつては林業と鉱山で栄えたものの、その後人口は大きく減少している。しかし、三十年前から積極的に移住を受け入れてきたことで、1ターンの組が徐々に増加。現在では住民の三分の一、約百六十人を数えるまでになった。

### 山里の暮らしを守る「百姓養成塾」

山で薪を集め、牛を使って田畑を耕し、人々が支えあつてつつましく暮らす…。そんな日本の原風景を消さないために。

二〇〇七年、色川の住民有志が、山里に暮らす知恵や技、文化を伝えていく「百姓養成塾」を立ち上げた。リーダーは、二十八年前に兵庫県から移住した原和男さんだ。初年度の塾生は五人。二年間、村で暮らしながら米づくりなどを行い、お年寄りから保存食や日用品のつくり方などを教わった。

春原麻子さんは、立ち上げに携わったひとり。横浜で育った春原さんは、大学院で人文地理学を専攻、修士論文のために全国の過疎地を巡り、その折に色川にも三カ月滞在した。

「自身が生きるたくましさや身につけて田舎の担い手となること。そんな志を持つ仲間を増やして全国の田舎が受け継がれていくことこそが、何よりの、自分なりの『環境問題』への貢献だと考えて、百姓塾を原さんとともに立ち上げるために色川へ移住しました」。

現在、地域の空き民家を借りて暮らしている。生活水は裏山から引かれた沢水。やわらかくておいしい水だ。独り暮らしで心細いのではないかと、向かいの家のお母さんがいろいろ助けてくれるし、毎日忙しくてそんなこと考えたこともないです」と笑う。

米づくりについては、「二年間多少の収穫がありました。まだまだ修業が足りないと思います」と春原さん。また実践には至っていないが、「一期生の原洋平さんと協力して



牛耕の復活にむけての訓練も行っている。お年寄りのしてきたことをよく見聞きし、身を持って感じ、その真似をすること。そして、その心に少しでも近付き、本当の意味で色川を受け継げる人材になりたい。百姓塾の二期生たちはそんな事を考えながら、自分の生きるべき場所を探している。



「百姓修業中。」  
<http://blog.goo.ne.jp/irogawa100sho>



### こだわりの純白天然塩

天然塩をつくる松村光隆、多持真さん親子は、二代続く1ターンの組だ。一九九七年に田舎暮らしに憧れて大阪から移住した光隆さんが、山仕事の合間に塩づくりを始め、二〇〇五年に新たに塩を炊く大釜をつくることになり、大阪に出て結婚した娘夫

婦が手伝いに来てくれた。光隆さんが冗談交じりで「忙しいから仕事として協力してくれないか」と言うと、夫の真さんは迷わず受けた。「ちょうど子どもができた時で、自然の中で育てたいなと思ってたから」。

の憧れだけで来ると戸惑うかも。でも、1ターンの先輩や地元の人たちが親身になって相談に乗ってくれるし、子どもの教育環境も少人数やから都会よりいいと思っています」。

数日置きに2トンタンク二本に海水を汲んでトラックで運び、薪でじっくり炊き上げる。釜の周辺は、冬はともかく夏場は耐えられないほどの暑さになる。煮詰めた塩は天日で水分をとばす。光隆さん親子は純白の塩にこだわり、フルイを使って丹念に海草屑などを取り除く。この天然塩をベースに、地元の素材を生かして、梅塩、ゆず塩、紀州備長炭をまぜた炭塩、抹茶塩、ハーブ塩などを商品化。天然塩のブランドとして販路も広がっている。

多持さん家は、小学校跡に建てられた1ターンの組向けの住宅で暮らす。二歳になった澤生くんが走りまわる校庭跡の向こうに、雄大な熊野灘が輝いていた。



真一さん自慢の塩(写真右)を、自宅で妻・あかねさんがバック詰める  
「熊野黒潮本舗」  
[www.zc.ztv.ne.jp/enmanji/eewada/kumano-kurosio.html](http://www.zc.ztv.ne.jp/enmanji/eewada/kumano-kurosio.html)  
tel.0735-56-0581

### 色川システム

1960年代までは銅山があったことで活況を呈していた色川地域。その銅山が閉山されると、最盛期には3,000人いた人口が500人を切るまでに減少してしまった。しかし、閉山後は、鉱毒によって荒れた山の緑や清流がよみがえり、里山の風景が戻ってきた。「この財産を受け継いでいくことが我々の仕事だ」という意識が住民の心に芽生え、77年からはその一環として移住受け入れを進めてきた。

特徴的なのは、林業や農業を志して移住を希望する人に、「何でも面倒を見るからとにかく来てくれ」というのではなく、山の暮らしの厳しい面を含めてきちんと説明するという。さらに短期滞在型住宅で実体験してもらい、そのうえで定住したいという意思を確認できれば、空き家や農地を紹介する。この方式は『色川システム』として他地域でも参考になっているところが多いようだ。

# Change & Challenge 1



光隆さん親子がこだわる純白の塩



塩水の様子を見ながら薪を調整



山間に塩炊きの白煙がけぶる



熊野黒潮本舗の塩製品



春原さん(左)と原さん



色川地域の風景



田植え時の棚田は水で輝く



色川の山並み